ねじりはちまき

令和七年　巳年

謹賀新年

皆様、お揃いでうららかな年をお迎えになられたことと、心からお喜び申し上げます。昨年中も皆様からは、有難いご指導を頂き誠に有難く、厚く御礼申し上げます。正月の祝辞として迎春初春の言葉が使われているとおり、正月は春から始まる立春のころに行われていました。春の訪れは様々な生命の誕生をもたらします。新春を祝福する『めでたい』という言葉は『芽出たい』つまり新たな芽吹きからきているとも言われています。誠によくできていますね。

今年も皆様にとって素晴らしい一年になりますように。どうぞ宜しくお願いいたします。

幸田　常一

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

玄関格子戸を引く。「おは、、、、」瞬間、モノトーンの世界。もの言われぬ寂しさ、なに？「、、、ございます。」「はーい」この１秒か２秒か。
家を修繕したいところがあるという事で、あるお客様へ訪問した時の事。
心のざわめきというか、不思議な寂しさを抑えながら話が始まった。
つい先日、突然奥様がなくなられた。との事。後に残った家族がどうしても使いづらいところだけを直したいという。

後になって思う。「嫁」という文字。真意は違うかもしれないが、家に女の人が普通にいるのと、その普通にいる女の人がいなくなるとこんなに空気が違うのか。この女の人の存在感、しかも普段は感じない暖かく包む空気感。よく説明できない大事な事が「嫁」の字にあるような気がしてくる。奥様がなくなられたことを知らない私は何故あのモノトーンの空気を感じたのかも不思議だ。おそらくこの記憶は、この感覚は、一生忘れないで時々思い出すことと思う。

この出来事で、家を作る職業に就く自分は、今まで何も考えないで、何も知らないで、家づくりをしてきたのか不安になった。だが、何をどのように理解すれ

ばいいのか、答えは出ていない。この暮れも新しい来年も、その次の年もずーっと考えることになるだろうと思う。今度お会いした時に、この話題に触れて頂いてお話ができれば、少しは心が晴れて住まいづくりにも役立つことでしょう。どうか皆様、迎える年がいい年でありますようお祈りいたしまして新年の挨拶とさせて頂きます。少しネガティブ過ぎましたかね。

幸田　一二

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昨年もお世話になりました。毎年感じることですが、年を重ねるたびに一年があっという間に過ぎ、年々一年が短く感じるようになっている気がします。

昨年は、ありがたい事に新築工事が続き、建築工事の一連の流れを通じて建築の楽しさや、難しさ、仕事の有難さを改めて実感いたしました。

また、今年の 4 月より建築基準法が改正されて確認申請の手続きが複雑化する見込みですので一層、建築に対する理解を深めていけるよう精進していきますので、今後もご指導ご鞭撻の程、宜しくお願いいたします。

本年も宜しくお願いいたします。

鈴木　信義

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新年あけましておめでとうございます。

旧年中は大変お世話になりました。本年も社員一同これまで以上に精進してまいります。何卒、ご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

社員一同

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

令和 7 年 1 月 5 日発行
有限会社　幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢八幡 1-1
電話　0243-44-3816

<後記>

2025 年、令和に元号が変わり早いもので 7 年が経ちました。皆様にとって穏やかで、無病息災の 1 年となりますように。

（ほしの）

夢を見続ける男　NO１２９

平安時代の国風文化

昨年のNHK大河ドラマは平安時代の"源氏物語" の作者紫式部を主人公とする「光る君へ」であった。そのドラマが終わったところで、源氏物語を生んだ平安時代（中期）とはどんな時代だったのだろうかと考えてみたいと思った。ひと言でいうと、貴族政権のもとで"国風文化"が花開いた時代といえる。奈良時代のような中国に倣った国づくり（律令の制定）の必要もなく、武士集団は未だ本格登場するに至らず、遣唐使の派遣も廃止され（中国から学ぶこともなく、脅威もなく）、いわゆる上流貴族の政権（藤原氏の摂関政治）の下で「内向きの平穏な時代」であったといえよう。　(注)藤原道長亡き後は内乱が起こる。

（１）平安という時代

では平安時代とはどんな時代だったか。平安時代は、奈良から平安京（京都）に遷都した７９４年から鎌倉幕府が成立（１１８５年）までの約３９０年続いた。そして、大きく三つの時期（前期・中期・後期）に区分して考えられる。　(注)江戸時代は２６０年間

ア）前期：平安京へ遷都した桓武天皇を初めとする歴代天皇が、半ば崩壊しつつあった律令政治（刑罰や政治の決まり事を定める法令によって国を治める政治）を再建しようとした時期

イ）中期：摂関政治（藤原氏が天皇の外戚となって摂政や太政大臣などの要職を独占した政治形態）が行われた時期。最盛期は藤原道長の時代。

(注)①外戚：藤原氏は天皇の妃に次々と自分の娘を入内させたのである。

②藤原氏：荘園（国の支配を受けない私有地）経営で抜きんでて財力があり、上流貴族間での権力争いに勝ち脱いで昇りつめた。一般に藤原氏というが、正確には「藤原北家」である。

ウ）後期：院政（上皇や法皇が幼少の天皇の代わりに政治を行う政治形態）が行われ、一方武士（平氏や源氏）が台頭し、政権を担う（平清盛）ようになる時期

(注)上皇・法皇：天皇が在位中次の天皇を指名し、譲位したのち院政を行う場合の前天皇の尊号。法皇は上皇が出家した場合の尊号。

（２）平安中期・藤原道長の時代

藤原道長の摂関政治時代は、平安時代に花開いた「仮名文学」の最盛期でもあった。藤原定子の女房（宮中に部屋を賜った身分の高い女房）が「枕草子」を執筆した清少納言が、藤原彰子の女房には「源氏物語」の作者・紫式部がいたのである。

宮廷の女房の正装である十二単（じゅうにひとえ）もこの時代に完成をみたといわれる。

（３）文字～漢字から「仮名」へ

日本で文字が使われるようになったのは、平安時代になってからである。この頃は、現代のような日本語（漢字、平仮名、片仮名）ではなく、中国の漢字を使って日本語を表記していた。

最初に登場したのが「万葉仮名」である。万葉仮名は現代の漢字と同じように「音」と「訓」の読み方があるが、漢字の意味を考えて使うことはせず、発音のみを表わした。これは、日本最古の和歌集「万葉集」に用いられていた。

その後、万葉仮名を簡略化した草書体「草仮名（そうかな）」文字が多く使われるようになると、その草仮名をさらに崩した「平仮名」が９世紀中頃から登場するのである。貴族の女性が手紙を書く際によく使用されたことから「女手」とも呼ばれた。

＜万葉仮名から平仮名への例＞

「安」→「あ」　「以」→「い」　「宇」→「う」　「衣」→「え」　「於」→「お」

平仮名といっても、現代のように一字一字離して書くのではなく、英語の筆記体のように、流れるような「連綿体」で続けて書くのが一般的であった。
平仮名の後に登場したのが「片仮名」で、当時は「かたかんな」と呼ばれ、「伊」を「イ」、「呂」を「ロ」など、万葉仮名の漢字の一部を省略して表記したのである。
文字が発展し、文字が日常的に使われるようになると、貴族の男女間で和歌を詠んで手紙（ラブレター）を贈り合う習慣が生まれるようになる。

（4）手紙の発展とともに使用された「文房具」

手紙の文化が発展するとともに、使用する紙や筆などの様々な「文房具」が登場し、書き手の教養やセンスを感じさせるポイントとなった。手紙を書く筆は、主にウサギや狸、鹿などの毛が使われ、特に毛が柔らかなウサギの筆が好まれ、細かい字を書く場合は鹿の筆が好まれたという。筆に付ける墨（すみ）と墨を入れる硯（すずり）も、創意工夫して造られるようになった。紙（和紙）は、７世紀初めに高句麗から製造法が伝えられるが、平安時代の中期になると改良を加え、薄くて強い和紙を造る技術が発達し、日本独自の「流し漉き」の技法が生み出されたのである。

(注)流し漉き：手漉きの一種で、和紙の紙料をすくい、縦横に動かし、繊維を絡み合わせる漉き方。現在にも受け継がれている。

（5）十二単（じゅうにひとえ）と染色技術（草木染め）

十二単は、平安時代の宮中に宮仕えする女房たちの正装である。単は袷（あわせ）に対する言葉で、裏地のない着物をいい、この単を何枚も重ねて着るものである。日本古来の繭（まゆ）は小さく、糸が細かったため、織り上げた生地も薄く、裏地の色が透けて見えた。その透ける特性を生かし、表裏の重色目（かさねいろめ）が楽しまれた。
当時の貴族は、四季折々の自然を愛していたので、重色目は季節ごとに色の組み合わせが重視されたようだ。平安時代の宮廷には、染めや織りを担当する部署があった。この時代には、日本独特の色彩名が定められ、草木の染色技術が確立したと言われる。重色目には、五つの基本色があったという。ここでは省略させていただく（表現が難しい）。

（6）寝殿造り一和風の貴族邸宅

平安時代は現在より気温が高く、住宅も風通しの良いものが求められた。壁はほとんどなく、取り外しができる建具で仕切って生活空間を創出していた。つまり建築様式は、唐風様式でなく、日本独特の和風様式が創出されたのである。その主な点は、ア)柱などの木部は塗をしない、白木づくりとしたこと、イ）履物を脱いで上がるようにしたこと、ウ）畳の上で寝るようにしたこと、エ）椅子を用いないようにしたこと、オ）家全体が、我が国特有の全面開放型にしたこと、などが挙げられる。

もっと書くべき事があるかも知れないが、今回はこの辺で終わりとさせていただきたい。

２０２４最後 晩秋の湯ノ岳、初冬の矢大臣山

（百：日本百名山、◎：日本二百名山、○：日本三百名山、カッコ内の数字は標高。上、2段目、下、左、右などは写真の位置）

【今回登った山】

湯ノ岳　（ゆのだけ、594m。うつくしま百名山、いわき市湯本温泉の西側にそびえる里山）

矢大臣山（やだいじんやま、965m。うつくしま百名山、田村市滝根町、小野町、いわき市の境界にそびえる山。小野町・いわき市最高峰）

7日（土）

安積山（額取山 1009m）を熱海口から御霊櫃峠まで縦走しようかなと思っていたら雪の予報。山友Nさんにラインしたら湯ノ岳に行くとのことだったので同行を申し出た。

10時前、登山口のある湯ノ岳中腹の丸山公園駐車場（上2枚）に着く。Nさんはお姉さんと姪御さんと一緒だった。

合流場所を不動滝と決め2つに分かれて出発。自分とNさんは山頂を経由して川上渓谷の不動滝まで下る。お姉さんたちは山頂を経由せずに最寄りの車道から不動滝に下るコース。

湯ノ岳はかつて、2011年2月中旬に川上登山口から登り不動滝も通ったはずだがあまり印象に残っていなかった。

10時、車道を横断し森の中に入って行く。Nさんが先導。広葉樹の雑木林の中を緩やかに登って行く。

紅葉がまだ残っていた（下）。

「千手モミの木」は枝が千手観音の手のようにたくさん出ている（上左）。樹間から大きなイチョウの木が見えた（上右）。

「第十の木戸 観音堂跡地」説明には「大同二年（807）法相宗の高僧徳一太子の勧請創建と伝えられる」とされている。御詠歌

「三箱に まつりこめたる湯ノ岳の ふもとにけむり いつもたえせぬ」の歌もあった。

イチョウの木の麓には「湯ノ岳観音堂別院」の小さなお堂があった（2 段目左）。さらに進んで行くと杉林の間から太平洋が見えた（2 段目右）。

山頂手前にミヤマシキミが朱い実を付けていた（3 段目）。

11：20 山頂着（下左）。

ここは「第八の木戸　経塚」（下右）。右手には構造物の無線施設（？）があった。

5分ほど歩くと鳥居があり、第七の木戸の標柱があった（上左）。

進んで行くと南西側が開けていて海が輝いていた（上右）。

いったん舗装路に出て横断しさらに下って行く（2段目）。写真左下の道路の白線は、12月1日に開催された「第19回いわき七峰縦走」（※）の白線のようだ。

（※）湯ノ岳を起点に水石山まで30 kmに及ぶトレイルがあり毎年12月に縦走会が実施される。湯ノ岳～天狗山～三大明神山～二ツ石山～閼伽井嶽（あかいだけ）～水石山～剣ケ峰をつないで縦走する。距離別のいくつかのコースがある。

下って行くと紅葉の真っ盛りに出会う（3段目）。

低地の湿気っている所ではコケと笹の緑が黄葉を一層引き立てている（下）。

「第五の木戸」周辺（上、2 段目）

「座禅楓」なるものがあった（写真 3 段目）。写真の中央右上。平らな岩の上に座禅を組んだ足のように楓の根が張っている（下）。
珍風景だ。

「第四の木戸　御前滝」（上左）。写真中央部を縦に曲りくねって流れる落ちる滝。写真ではなかなか分かりづらい。

12 時半過ぎ、合流地点「第二の木戸　不動滝」着。お二人は既に着いていた。（上右）。

滝つぼ（2 段目）。水がきれいだ。

Ｎさん達家族 3 人は互いに写真を撮りあい、自分も3人の写真を撮ってあげた。3 人で出かけると 3 人が写る写真は無いと言う。確かにそうだ。お昼を食べ1時間位ゆっくりした。

記念写真を撮って貰う（下）。

ここから再び二手に分かれ、自分とＮさんは渓谷沿いを登り返すコースに進む。Ｎさんは以前にも何度か通っているが一人ではなるべく行きたくないとのこと。踏み跡が一部不分明のところもあるとのこと。

何度か渡渉したり、踏み跡が薄くなったりして戻ったりしながら登って行く。（次頁上 5 枚）。見どころがたくさんあった。

15 時半、登り切った道路の所で姪御さん運転の車が待っていてくれた。

第一木戸から第十木戸までの参拝順路を今回は逆にたどったコースと、不動滝から渓谷沿いに登り返すコースを取った。自分としては湯ノ岳にこういうところがあるとは知らなかったので、うれしかった。冬場のトレーニングとしても楽しかった。Nさんは思いのほか時間がかかったと言っていた。

丸山公園の駐車場でお別れする。いわき湯本 IC に近かったが高速を使わずに小野町経由で帰宅する。経験者の同行はありがたい。得難い体験をすることができた。

初冬の矢大臣山

12 月 21 日（土）午後から田村地方の町で「成年後見講座」があったので申

し込んでいた。ついでに、午前の時間を利用して矢大臣山に登ることにした。

矢大臣山は何度も登っているが久しぶりだ。

山友Nさんも講座に参加するとのことだったので、一緒に登ることにした。小野町湯沢の登山口駐車場には車はなかった（上）。8：15 出発。日陰にはサラッと雪があった。

30 分くらい歩いた所のブナの大木があったところで休憩（下）。

「湯沢ブナものがたり」と書かれた説明板には「近年までブナの原生林があったこと、営林署から払い下げを受けて炭を作り、昭和 20 年代前半まで夏井駅から出荷されたこと、約 30 年の夏井駅の炭の取り扱いは日本一の記録があることなどと書かれている（湯沢ブナを愛する会平成 28 年 5 月）。

「一番太いブナの木　樹高 30m、幹周り 3m50 cm、樹齢 500 年（推定）」とも書かれていた。

途中「長持石」で休む。説明板に「むかし夜明け前に長持ちを山頂に上げると陸奥の富士山になると告げられた老夫婦が大きな長持ちを担ぎ上げここまで来た時、一番鳥が鳴き突然長持ちが割れて石になった。」と書かれている（次頁上左）。

山頂は広く展望台（上右）があり、電

波塔が建っている。山頂は展望台の先だ。10 時過ぎ山頂着（2 段目左）。社にお参りする。東側（海側）（2 段目右）、左奥が湯ノ岳か。

南西側（3 段目）、手前中央が蓬田岳（952m 東北、うつくしま百名山）。中央右奥に二股山（○1544m）左奥は那須連峰、白くなっている山は何だろう？　草紅葉の上で休みながらＮさんと見えている山を同定する。横になって昼寝でもしたい風景だが、寒い。若者のペアが登ってきた。30 分ほど休み下山する。下山途中で 3 組の熟年グループとすれ違う。　11：45 駐車場着。休憩含め約 3 時間半の矢大臣山行を終える。駐車場には宮城の車が 2 台、福島と郡山の車が各 1 台停まっていた。

令和７年１月　ＮＯ１３４　アンチ・エイジング　山旅遊人

元旦の計：日本 300 名山残り 3 座を踏破。そのための体力保持！